

## 歌会始と学生短歌コンクール、その比較から見えるもの

### 大学百周年記念の百人一首

- ・ 戦争の終わりの証は何ですかイラクの瓦礫に立つ子どもたち（茨城県 高校2年）
- ・ 履修漏れ関係ないと思ったら校門付近にマスコミの人（埼玉県 高校2年）
- ・ 「このままじゃあんたニートになるしかない」母の辞書に「冗談」は無い。（新潟県 高校1年）
- ・ 大きな木はいっぱい夏を抱えてる幹の樹液と蟬の抜けがら（岡山県 高校1年）
- ・ 降水率0%といったのに君という名の夕立が来た。（岡山県 高校2年）

2007年1月15日に発表された「現代学生百人一首」の入選作110首から選んでみた。寺山修司や俵万智を思わせる青春の歌も多い。今年20回目を迎えた、この短歌コンクールは、「短歌の甲子園」と化し、多くは学校単位で応募し、入選や入選者の数が競われ、学園の宣伝にも一役買っているのはスポーツと一緒にある。1987年、東洋大学の百周年記念行事として始められた事業が見事に定着し、今では若者の言葉、風俗、心情を知るよすがにもなっているようである。その応募歌数は、回を重ねるごとに増加し、今年60,759首であった。近年は6万首前後を推移するが、過去最高は2002年の69,970首であったという。もっとも、この百人一首の応募校の中には「歌会始」にも積極的に取り組むところもあり、若年層の入選に腐心している様子の歌会始の政策的意図にも合致しているようである。学校単位での応募は生徒や教師にとって問題は多いようだが、一私学のメセナとしては成功している例であろう。今年の最少年齢の入選者も、いわば常連の大阪の清風高校の生徒であった。こうした短歌コンクールを歌人団体やメディア、文化団体、上記のように大学などが主催するのはそれなりの意味があると思う。

### 歌会始の行方—国家と文芸

しかし、同日の1月15日に開催された歌会始は、伝統的な文化遺産のようにも言われ、皇室と国民の貴重なパイプとも喧伝されてきたが、現在は単なる短歌コンクールの様相を呈している。

- ・ 務め終へ歩み速めて帰るみち月の光りは白く照らせり（天皇）
- ・ 年ごとの月の在り処を確かむる歳旦祭に君を送りて（皇后）

今年の歌会始での作品である。天皇には定年もなく、退職金もない。夫妻の公務の厳しさが歌われているように思う。当日の夕刊各紙によれば、上記2首とともに、お題「月」を詠んだ皇族、召人、選者の各1首と応募歌数23,737首の中から選ばれた10首とが発表された。テレビのニュースでは、あの独特の朗詠を交えてその様子が伝えられた。

歌会始の応募歌数は、今世紀に入って2000年22,618首から2万首台の前半を推移し、2004年26,075首、2005年27,498首をピークに低迷し、今年23,737首であった。過去最高は1964年の46,908首であったから、その半数でしかない。そもそも、歌会始とて「月次歌会」の延長線上で、宮廷内で開催される宮中行事の一つではなかったのか。

このブログのマイリスト「短歌の森」の「芸術選奨はどのように選ばれたのか」でも述べたように、国や自治体が主催する報奨制度やコンクールは、短歌、広くは文芸にとってプラスになるより弊害が多い。文芸の評価は、本来、国や自治体から、そして皇室からは当然距離を置くべきもので、読者ないし受け手、選考委員や選者個人の責任において果たされるべきであろう。ところが、選考委員や選者を介してなされた評価は公的な「権威」をまとって一人歩きすることになり、その選考に携わることが一つのステイタスとなる。彼らもそれを最大限に利用するという悪循環は際限なく繰り返されている。

### 天皇制の行方

歌会始の作品にみる天皇・皇后の努力や思いとは別に、現行憲法・法律上の地位や公務について

は人権感覚にそぐわないものがあり、皇太子妃の病気、世継ぎ問題とも無関係ではない。昨年には「明仁さん、美智子さん、皇族やめませんか—元宮内庁記者から愛をこめて」（板垣恭介 大月書店 2006年1月）という本まであらわれた。この著者は宮内庁記者クラブの記者、情報量など比較にならないほど少ない私でさえ、皇族は全員いまの代を限りに辞めていただき、ひっそりと暮らして欲しいと思っている。憲法上、種々の権利を奪われている皇族たち、現行制度上の天皇の地位や公務は、とりあえず必要最小限度にとどめたい。今から就職や年金制度の適用は困難だろうから、生活の保障も仕方がないかもしれない。現在のような天皇制を黙認してきた国民としての責任もあるだろう。天皇制と私たちの暮らしや文化との接点の在りようをじっくりと検討すれば、この矛盾に満ちた制度の行方は自明であろう。この制度の終焉への道筋を考える時代が到来しているのではないか。

天皇の一首が朗詠されるのを聞いて、そんなことを考えていた。 (2007年1月20日)